慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	H. Guitton, Economie Rationelle, Economie positive, Economie Synthtique. 1938.
Sub Title	
Author	寺尾, 琢磨
Publisher	慶應義塾理財学会
Publication year	1939
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.33, No.2 (1939. 2) ,p.259(113)- 267(121)
JaLC DOI	10.14991/001.19390201-0113
Abstract	
Notes	
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19390201-0113

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

H. Guitton—Economie Rationelle, Economie Positive, Economie Synthétique. 1938.

寺尾琢磨

佛蘭西の著名な理論經濟學者ガエタン・ピルー Gaëtan Pirou（巴里大學法學部教授）の監修の下に「經濟理論史研究」（Etudes sur l'Histoire des Théories Economiques）と題する叢書が刊行されてゐるが、本書はその第五卷に該當する。著者アンリ・ギトンはナンシイ大學講師であり、その近著「キング法則の研究」（Essai sur la Loi de King, 1938）は理論經濟學及び統計學の見地から既に學界の注目を惹いて居るのである。

本書はその表題の明示する通り、方法論の立場から經濟學の發展をば合理經濟學、實證經濟學、綜合經濟學に三分類したもので、副題に「ワルラスよりムーアへ」と記されてゐる。本文一四六頁、それにピール教授の六頁に亘る序文が添へられてゐる。經濟學の三分類といへば吾人は直ちにゾンバルトの『三つの經濟學』（Drei Nationalökonomien, 1930）を想起するが、ゾンバルトに於ける分類標準は經濟現象に對する認識基礎に外ならず、これよりして彼の所謂 Die richtende Nationalökonomie, Die ordnende Nationalökonomie, 及び Die verstehende Nationalökonomie の三つが生れたのである。故にギトンとは觀點が全く違つてゐるが、併し一般に三分類なるものは凡ゆる分

類のうち最も多く採用されるものである。これは思想發展の過程は、これを辯證法的に解釋するのが多くの場合最も容易であり且つ合理的だからであらう。事實ギトンも本書の結論「經濟理論のリズム」に於て上記の三つの遂次的發展を略記した後、次く如く述べてゐる。Cet ordre chronologique répond à un ordre parfaitement logique. Et ce n'est pas un hasard. Si l'on en croit la philosophie dialectique, la loi du rythme ternaire traduirait la tendence fondamentale de l'esprit humain.…La pensée économique se semble donc pas avoir échappé au processus dialectique. p. 143（この時代的順序は全く論理的な順序に合致する。そは偶然ではない。辯證法的哲學を信ずるならば、三つのリズムの法則は人間精神の基本的傾向を表現しやう。…經濟思想も辯證法的過程を免れたとは思はれない）。即ち彼に於ては合理經濟學は辯證法に於ける正であり、實證經濟學は反、綜合經濟學は合なのである。

彼の謂ふ合理經濟學とはケネーに始まり正統學派を經て限界效用學派、就中ワルラスに至る抽象的演繹的經濟學である。合理經濟學の目的は經濟生活の全體を認識することにある。現實にして直接的な事實は、全體の小部分に過ぎないから、この派に取つては事實は二次的なものである。然るにこの全體なるものは把捉し得ないから、進んでこれを作り上げねばならぬ。この場合には一に吾人の推理によつて或る代表的モデルを想定する外はない。即ち推理に對する信念こそこの派の特色であつて、事實は單に或ひは問題の出發點として、或ひは理論の證明としての價値しか附與されない。ギトンはこの主張の始めて明確に表明されたのはケネーの經濟表 Tableau Economique であるとし、その中に窺はれる均衡概念について一應の說明を加へ（八—一三頁）、次でリカアドオに移つてその地代論から彼の假說的動態論が畢竟は決定的靜態に移行せざるを得ない論理過程を說明する（一三—二二頁）。ギトンはネケー及びリカアドオを先驅者とするこの學派はワルラスによつて大成されたと見、以下四十頁に亘つてワルラスの體系を詳論する。即ちワルラスに於ける一般均衡理論 Equilibre générale と數學的方法こそ、合理經濟學の結晶たる所以を論じたもので、一般均衡論はケネーの思想を發展せしめたもの、數學的方法はリカァドオの方法を擴充したものと見られるのである（二二頁）。ワルラスの中心概念は周知の如く一切の經濟事象をば交換事象として觀察することである。彼に於ては地代、賃銀及び利子は何れも分配の問題よりは寧ろ生產の問題として取扱はれる（三二頁）。そしてこの事が彼の主觀的價値論の背景なることを忘れてはならぬ（三一頁）。交換は凡て市場現象であるから、解析の對象は當然市場となるが、彼の問題とするのは生產物市場（Le marché des produits）、用役市場（Le marché des services）及び資本市場（Le marché des capitaux）の三市場である。これら市場に成立する交換方程式から一般均衡の方程式への過程こそ、ワルラスに於ける中心部分に外ならない。

さてギトンの解釋によれば、ワルラスの不備は次の二つにある。第一は彼が企業者を常に二次的に取扱つたことで、第二は貨幣を排除してゐることである。これらの假定は彼の前提からは妥當とされるが、併しこれは危險な抽象である。ワルラスに於ける靜態より動態への移行が一ケの純粹な擬制（une pure fiction）なのはこれに基く（五七頁）。社會的經驗を對象とする經濟學は當然かゝる擬制から脫却せねばならぬ。これを可能ならしめる途は先ず實證經濟學から開始される。

斯くて第二章の主題は實證經濟學である。抽象的經濟學に對する反動は既に獨逸歷史學派に擡頭した。これら先驅者に對する考察はその第一節 Les manifestations anciennes et implicites de l'attitude positive に略述されてゐる（六五—七〇頁）。ギトンはこの學派の非科學性をその相對性に認むが如くである。曰く「Cést une banalité de redire

leur suspicion à l'égard des déduction. Les historistes sont les premiers économistes relativistes: pour eux rien n'est absolue, rien n'est définitif dans le monde vivant. C'est la première condamnation de l'universalisme et du pérpetualisme. Une observation n'a de valeur que dans le cadre spatial et temporel où elle a été faite. Généraliser c'est extrapoler hors des limites permises. C'est une opération toujours tentante, mais toujours dangereuse. Il faut être plus modeste. Il faut donc renoncer à voir au delà frontières de son pays et de son époque. p. 69.」と。

よつて彼の指す實證經學濟は自ら統計學派のことになる。七一頁から九二頁に至る第二節 Les manifestations récentes de l'économie positive—Ambitions et limites de la statistique 及び九三頁から一〇一頁に至る第三節 L'économie positive conçue comme une dynamique expérimentale の二つの節の中に彼は、統計的方法について可成り深い理解を示してゐる。統計それ自體は現實の反映であるから、それを云々する限りに於ては統計學派は確かに實證學派であるが、併し吾人は與へられた統計をそのまゝの形で使用する事は出來ない。彼は言ふ「Le fait a beau être élaboré, isolé et affiné par l'intelligence, il est à l'origine une donnée première extérieure à la Volonté humaine. Il est le maitre que l'on veut sinon servir, du moins comprendre. Il contient en lui enseignement. Mais comme lui-même il est muet, c'est à l'intelligence humaine à le faire sortir de son silence, à lui faire révéler les mechanismes auxquels il obéit.」と。これを可能ならしめるものは所謂統計的解析と稱せられる手續である。この手續は畢竟與へられた統計粗材から或る一般性を導き出す方法であり、從つてこの場合の數的與件は既に多かれ少かれ抽象化されたものである(八〇頁)。ギトンはこれを各種の指數や相關係數を例として說明してゐる。即ち統計的方法が前進するに從つて、實證經濟學を目指す統計學派が寧ろこれから離脱する傾きあるは疑へない事實である。然るにも拘らずこれが依然として合理經濟學と區別される理由は、一定の理論乃至假定を前提としない事である。統計學派に於ても結局問題の中心は現象の均衡である。この事は平均値とか傾向線とかの所謂正常値がこの派の主たる對象たることによつて明かである。殊に統計學派の活動は景氣變動の研究に於て最も顯著な進歩を示して居り、その場合、景氣なる概念それ自體は經濟生活の一定の基準を設けずしては考へ得られないものである。唯だこの場合、この派の謂ふ均衡乃至正常の狀態とは何れも經驗自體から導き出すのである。換言すれば與へられた資料そのものに或る解析を施して以てこの正常値を決定せんとするのである。斯くて彼が「統計的解析を如何に推し進めても、これから自發的に理論は生れて來ない」(九〇頁)と斷定してゐるのは全く妥當である。これを一層極言すればミッチェルの徹底した實證主義を承認せざるを得ない。ミッチェルは言ふ「事實として語らしめよ。經驗に托し得ない一切の理論を假說を斷念せよ。時系列を觀察してそれが何物かを暗示するか否かを看よ」と。アフタリオンは限界效用學說に囚へられ、從つてその統計的結論は常に必ずしも自己の主張と合致しない恨みがある。卒然これを調和せしめんとすることは論理の飛躍を必要としよう(九二頁)。理論と統計とを融合せしめる爲に或る體系的方法を要請されるのは斯くて自然の道程と考へられるのである。最後の第三章はこの試みの最も輝ける先驅者ヘンリー・ムーアを主題とする。

如上の二つの經濟學——合理經濟學と實證經濟學——は相互に顯著な對立を示してはゐるが、この兩者が全く相容れぬものと考へられない。蓋し經濟學の目的が常に經濟生活の理解と說明に在ることは言ふ迄もないところであるが、右の二つの經濟學は結局この共通の目的への努力に外ならぬからである。この二つの經濟學に於て、一方の

長所は他方の短所であるから、正しき經濟學の方法は右兩者の折衷乃至綜合によつて求められる筈である。實證經濟學は拾ひ集めることしか知らぬ蟻であり、合理經濟は內部から引き出す絲で網を張る蜘蛛である。そこで花から花へ飛んで蜜を求めこれを自己獨自の方法で釀造する蜜蜂は右の二つの折衷と見られやう。吾人の要求する新たな經濟學はこの蜜蜂の方法に外ならぬ(一〇三頁註)。即ちヘンリー・ムーアが合理經濟學から或る均衡の概念と完全な知識構成の希望とを、實證經濟學からは事實に對する不斷の專念を抽出し、この二つを結合することによつて新たなる綜合經濟學を樹立せんと試みた所以である。

ムーアはその初期の著作、例へば「賃銀の法則」又は「經濟的循環論」に於ては未だ實證的方法に終始してゐた。然るに一九二九年の「綜合經濟學」(Synthetic Economics)は經濟學をば均衡の現實的科學たらしめんとするものである。私は既に本誌上に「具體的需要曲線の導出について」(第三十卷第二號)、「ヘンリー・ムーアの具體的動的均衡理論體系に就て(第三十卷第七號)及び「天體的景氣理論の二つの基型」(第三十一卷第六號)の三つの論文を寄せて、以て彼の學說の一般を傳へた。此處ではギトンが如何に彼の方法を理解してゐるかを聽かふ。

ムーアに從へばワルラスの均衡論は完全な自由競爭の如き非現實的假定に立脚する。故に第一の問題はワルラスの純粹經濟學に於ける斯かる前提を修正し、より現實的なものに改めることである。次で第二の問題はこれによつて得られたる新たな方程式に現實的統計的形態を附與することである。第一の問題は彼に於ては結局需要彈力性の公式を決定することに外ならぬ。ワルラスは總ての經濟事象をば交換形態に於て認識してゐるから、ワルラスの均衡論に據る以上、交換比率を決定する需要彈力性が問題の中心となる。然るに一商品の需要は他の總ての商品の價格の函數なることは明かだとしても、後者を直接に計算することは不可能である。よつて吾人は反對に、價格の小なる變動によつて生ずる需要の相對的變化即ち需要彈力性(これは微係數である)から逆に遡つて、即ち積分的に基函數を求める外はない。斯くてムーアは三つの可能なる彈力性を想定したのである。次で彼はこの公式に具體性を附與する爲に統計的與件を導入したのであつて、これによつて得られた需要曲線は同時に動態的性格を與へられたのである。これを更に發展せしむることによつて動的均衡の方程式に到達する經路に就てはギトンは極めて簡單に止めてゐるが、私は上記の拙稿の中に可成り詳細に述べて置いた。

ムーアの試みは素より多分に疑問なきを得ない。私は既に上記拙稿の中に、統計學的見地からの若干の疑問を開陳した。ギトンはこの方面からの批評は一切避けて、寧ろ甚だ抽象的な次の如き批判を下してゐる。即ちムーアの所論は甚だ魅惑的であるが、而も未だ部分的にしか成功してゐない。彼は確かに大なる綜合經濟學の基礎を樹立した。蓋し彼の合理經濟學及び實證經濟學の美點と缺點とを共に正しく認識し、その何れにも偏せざる體系を求めたからである。乍併、彼の到達した結果から見れば、理論と經驗の兩者の缺陷を具備してゐるとも言へる。例へば彼はワルラスの非現實假定を排除したと稱し乍ら、而もワルラスの方程式を出發點としてゐる以上、完全な自由競爭の如き前提から全く脫却したとは言へまい。且つ全く靜態的なワルラスの方程式に元來動態的な統計的數字を代入して果して矛盾なきを得るや否や、特に普遍的綜合經濟學は合理經濟學的には是認しうるとしても、實證經濟學的に果して可能であらうか。ムーアの實績を見るに、結局特殊の一商品についての具體的表現を與へたに過ぎず、而もこの場合にも、それが著しく單純化されてゐるため、現實とは依然として大なる懸隔があるのである。更に普遍的具體的表現を與へるためには、單に國內の與件のみならず、國際的與件をも考慮に入れる必要があらう。最後に、彼はワルラスの構圖を改善せんとして寧ろこれを複雜化するの結果に終つてゐる。

併し彼の體系は理論の缺陷を脱却して居らぬ許りでなく、實證主義のそれからも免れてゐない。その綜合經濟學は事實をその表面に於て撮影してはゐるが、併しその内部に迄は貫徹してゐない。そは市場の構成或ひは企業に於て認められた諸傾向の原因をも、これら諸傾向を聯結する鎖をも研究してゐるとは思はれぬ。即ちそは現實的といはんよりは寧ろ形式的である。傾向線をば經驗的に知られた均衡線として考察してゐるから、この點では實證主義的幻影に囚はれてゐるといへやう。斯くて彼の體系はその最初に目的としたものとは比較にならぬ未完成物である。(唯だもし吾人がこの體系の缺陷を充分に認識しうるならば、眞の綜合經濟學の樹立される日も決して遠くはないであらう、云々。

× × ×

以上が本書の輪廓である。綜合經濟學が、その大なる缺陷にも拘らず、而も豊富な將來を約束してゐると見る點に於て、本書の結論は私が上記三つの拙稿に於て到達したそれと軌を一にするものである。ギトンがムーアを論ずるに當つて統計學の理論よりする批判を避けてゐるのは甚だ物足らぬ。私見を以てすれば、この點こそムーアに於て最も直接的な問題である。猶ほ本書に於て特に興味を與へるものは、冒頭を飾るビルー教授の論文であらう。教授はギトンの努力を賞揚しつゝもなほ自ら以てその所説の不當となす點を遠慮なく指摘してゐるのである。即ち教授に從へば第一にムーアは全くワルラスの直接の流れを汲むもので、(à mon sens Moore est essentiellement un disciple de Walras)理論系統上格別區別さるべきものではないといふ。換言すれば依然として合理經濟學の主張者と認められねばならぬ。よつて三分法を採るならば、ワルラスやムーアを含む合理經濟學、歴史學派と統計學派を含む實證經濟學及びフランソア・シミアン(François Simiand)によつて代表される特殊の歸納經濟學の三つと爲す可しといふのである。教授の解析に從へば、事實の觀察から理論に到達せんとするシミアンの方法は所謂ベーコン流の歸納法に立脚するもので、彼に於ては事實の觀察は單に正規性抽出の出發點たるに過ぎない(序文七頁)。即ちムーアとは全然異る方向から理論と現實との聯結を企つるもので、この意味に於て、彼を以て新たな經濟學の主張者と見做すべしといふのである。併しムーアの如く一定の經濟理論を前提としこれを現實とを結合せしめんとする方法が、依然として合理經濟學だといふビルー教授の言には遽かに贊し難いものがある。シミアンについては私自身別趣の見解を持つて居り、次の機會に開陳したいと考へてゐる(VI+146, Libraire du Recuil Sirey, Paris.)(一九三九・一・二八)